昭和二十九年二月十日　初版印刷
昭和二十九年二月十五日　初版發行

昭和文學全集30
久保田万太郎
岸田國士集

著作者　久保田万太郎
　　岸田國士
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井壬下町一四三〇

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一一一一四

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　扶桑印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　宮田製本所

Printed in Japan

久保田万太郎
岸田國士 集

昭和文學全集

角川書店版

目次

久保田万太郎集　卷頭寫眞　久保田万太郎　岸田國士

筆蹟

大寺學校　七

春泥　四一

青葉木菟　九四

花冷え　一〇九

波しぶき　一二〇

市井人　一四八

うしろかげ　一八五

年齢　二〇八

解説　戸板康二　二一〇

年譜　二一三

岸田國士集

筆蹟

暖流　二一九

紙風船　二四九

落葉日記　三五五

歳月　三七一

女人渦仰　三九三

戯曲及び戯曲作家について　宮崎嶺雄　四〇三

解説　四〇七

年譜　四一一

久保田万太郎集

大寺學校

東京淺草

大寺三平　大寺代用小學校長（六十一二）
峰　一郎　同　高等科受持の先生（二十六七）
光長正弘　同　尋常科受持の先生（五十八九）
玉守久一　同　新任の先生（二十八九）
高桑虎夫　祝賀會發起人（學生）
佐々木善吉　同
岩田　清　同
たか子　校長の姪（二十四五）
お　欠　たか子の裁縫の弟子
おあき　同
おくめ　同
おたま　同
おさと　同
おゆき　生徒の一人
外に、岩井屋（古着屋の若主人）片倉（骨董屋の若主人）しん馬（落語家）祝賀會來會者大ぜい

明治の末

第一幕

第一場

大寺學校の教場。――といつても、町中の、あたりまへのうちを二三げんつぶして無理からさうした恰好にした古い建物の一部。十月上旬の曇つた午後。――退けてもうみんなかへつたあと。――當番のものだけ三四人殘つて掃除をしてゐる。

間。

峰、階下から上つて來る。

峰　出來たか、掃除？

生徒の一人　もう少しです。

峰　遊んでないで早くやんなさい。

峰、そのまゝそこに立つ。――黑板の惡戯がきをみつけて消したりする……

やゝ長き間。

……掃除、すむ。

峰　すんだら歸つていゝ。

生徒たち、箒や雑巾をしまつたり開けツぱなしたはうゝの窓を閉めたりする。

光長（階下から上つて來る）峰先生……

峰　……？（ふり返る）

光長　何とも昨日は。――相濟みません、毎度……

峰　何でしたつけか？

光長　いゝえ、わたくしが早くもどつたので。――あとの稽古をまたあなたに……

峰　あゝ。――いゝえ、お易い御用です。（わらふ）

光長　毎々、ほんたうに御厄介ばかりかけます。（眼をショボ〳〵させる）

峰　それよりいかゞです、御病人は？

光長　有難う存じます。――何分にもこの陽氣で……

峰　いけませんか？

光長（ほと〳〵したやうに）どうも、その。――因果なそのやまひでして……

……かへりかけた生徒たち、包をかゝへたまゝ、二人のそのさまを不思議さうにみて立つ。

峰　何をみてゐるんだ、お前たちは？

生徒たち、狼狽てゝ階下へ行く。

峰　お幾つにおなりです、奥さん？

光長　七になります。

峰　と？

光長　いゝえ、四十七に……

峰　お若いんですな、まだ？

光長（それにはこたへず。――嘆息するやうに）今年でちやうど九年になります……

峰　九年……？

光長　いゝえ、三十九の秋はじめて患ひつきまして……

峰　で、その間、始終おやすみになつたきり――といふわけでも……？

光長　いゝえ、いつそ夫でゐてくれるとまた始末も好いんですが。――なまじ容體にさしひきのあるだけ。――工合のよいときに

はあたりまへの體とかはりません。——話をしても分りますし、子供の世話もしてくれますし。——それこそわたくしが少々無理なことを申しても、その無理を默つてわたくしに通させてくれます……

……（うなづく）

峰　やまひがきざして來るとそれが。——

光長　一朝さうなるとそれが何もかも分らなくなります。子供の見界もつかなくなります。——誰でもそばにゐるものに喰つてかゝります。

峰　……

光長　實際。——實際もう恥をお話しなければ分りませんが……

峰　つまりヒステリイの……

光長　そ、さうなんで。——それの强いんで……

峰　さういふとき、何とかそれを押へることは出來ないものなんですか？——たとへば、まア、さういつたときの何か藥とか。

光長　さうなると、いえ、藥といふものを一切飲みません。——何といつても强情を張つて飲みません。——押していへば毒をのませて自分を殺すのかと一層猛り立ちます……

峰　なるほど、そんな風ぢやア……

光長　いろ〳〵人がいつてくれますので、お加持もやつてみました、祈禱もしてみました。——いろ〳〵信心もしてみましたが、どうもさて、これといふげんが一向みえません。

峰　……

光長　お醫者も、ありやうは、手のつけやうがないといつてをるので。——氣長に、まア、わきでよく面倒をみる外はない。——さうするよりみちはない。——なまじのことをして、この上やまひを募らせたら、それこそ取返しがつかない。——さういひますので……

峰　……

光長（急に）どうも、これは。——とんだこれは愚痴をお聞かせいたして……（さびしくわらふ）

峰　いゝえ。

光長　ついどうもお心やすだてに。——年甲斐もなく。——相濟みません……

峰　（しみ〴〵と）お大ていぢやアありませんなア、しかし……

光長（さそはれてしみ〴〵と）有難う存じます。——これも、いえ、何事も約束と思へば……

峰　……

光長（階下へこなし。——聲をやゝ落して）これは、しかし、どうぞこゝだけのお話にねがひます。——校長にも、たか子さんにも、かうした深いことはまだ……

峰　大丈夫です、御心配には及びません。——決してそんなよけいなことは……

光長　あなたゞけ。——全くこんなお話し出來るのはあなたゞけで……

峰　それよりも、先生。——さういふことだと、おうちの方がみなさん、あなたのお歸りを待つておいでゞせう。

光長　それは、もう、わたくしの出たあとは子供ばかりなので……

峰　でしたら、少しでも早くおかへりになつたら……？

光長　いえ、それがその——實は、今朝ほども、そんなこんなで出て來るのが遲れまして。——校長と、まだ、ほんたうに顏を合せてをらないので……

峰　そんなこと、あなた、どうだつていゝぢやアありませんか？

光長　いえ、でも……

峰　よけいな御斟酌ですよ、それは。

光長　しかし……

峰　かまやアしません。——もし何とかいつたらわたしから校長にさういひます。

光長　尤も、昨夜電報をうつて置きましたから、奉公さきからいまごろ上の娘が歸つてまゐつてをるだらうと思ひます。——それさへ歸つて來てくれゝば……

峰　それにしたつて、あなた、早くおかへりになるに越したことはないでせう。

光長　それは、まア、……

峰　淸書の直しがあつて、今日はまだ、わ

たしはかへれません。——ずつと殘ります。……だから何かあれば代りはして置きます。

光長　では、まア。——とにかく挨拶だけで・もいたして……

峰　えゝ。

光長　いろ〳〵どうも。——相濟みません……

光長、階下へ行く。——猫背の、さうでなくてもまるい背中をよけいまるくしながら……

間。

峰、机のそばに椅子をよせ、抽斗から埃だらけのインクに筆を出す。——片つ方の抽斗からは毛繻子の風呂敷につゝんだ圓壺の清書を出す。……露地の下で、飴屋、チャルメラをふきはじめる。——その、しづかな、泪ぐましい、あてどのない音いろ。

間。

峰、筆にインクをふくます。——清書を直しはじめる。

おゆき　（そツと下から上つて來る）先生……

峰　（顔を上げて）何だ、おゆきか？

おゆき　えゝ。

峰　何か用か？

おゆき　あのウ、お座の中に忘れたものがあるんですけど……

峰　忘れたもの？

おゆき　えゝ。

峰　何を忘れた？——お手玉か？

おゆき　いゝえ。

峰　毬か？

おゆき　いゝえ。

峰　何だ？

おゆき　……（わらふ）

峰　いゝから持つて行きなさい。

おゆき、いそいで自分の机のそばによる。——壺をあけて毛絲の編みかけを出し、峰にみえないやうに手早く袂の中に入れる。

峰　お洒落をしてどこかへ行くのか？

おゆき　えゝ。

峰　どこへ行く？

おゆき　觀音さまへ。

峰　な、いゝ着物を着替へて行くのか？

おゆき　でも、今日は。——今日は菊市ですから……

峰　菊市？

おゆき　えゝ。

峰　さうか、それで、今朝、雷門の近所を、菊をもつた人が大ぜいあるいてゐたんだな。——どうするんだ、あの菊？

おゆき　上げるんです。

峰　上げる？

おゆき　上げてべつのを觀音さまからいたゞいて來るんです。

峰　いたゞいて來てどうするんだ？

おゆき　頭痛のおまじなひになるんです。

峰　お前、頭痛もちか？

おゆき　いゝえ、あたしぢやアないんです。

峰　誰と行くんだ？——姉さんとか？

おゆき　いゝえ。

峰　おつ母さんとか？

おゆき　えゝ。——姉さんは加減が悪いんです。

峰　加減が悪い？——またか？

おゆき　えゝ。

峰　どうしたんだ、お前のところの姉さんは？——始終このごろ體ばかり悪いぢやアないか？

おゆき　えゝ……（顔に暗いかげ振めゐる）

峰　よつぽど悪いのか？

おゆき　いゝえ、そんなぢやアないんです……

……チャルメラの音。

大寺校長、階下から上つて來る。——袴を脱いだあとで幅の廣い帶をぐる〳〵卷にしてゐる。

校長　峰君……

峰　……？（向く）

校長　御苦勞さま、遲くまで……

峰　（どつちかといへば無愛想に）いゝえ。

校長　……

峰　（さきをくゞるかたちに）何か御用ですか？

校長　ちよつと君に……

峰　それでしたらお呼び下されば……

校長　いや、それほどの……

峰　……

校長　すこし君にお願ひがあつてね……

校長、おゆきのはうをみる、——おゆき、そのまへに階下へ下りてゐる。

チャルメラの音、遠ざかる。

間。

校長　實は野上のことだが……

峰　えゝ。

校長　何か、あの子供、昨日稽古中にしくじりをやつたさうだが……

峰　校長のまへですが、あんな強情な、わがまゝな、素直でない子供もありません。——一度いつか思ひきりいつてやらうと思つてゐました。——ちやうどいゝ機會でしたから……

校長　何をしかし……？

峰　いゝえ、事件そのものはつまらないことで、わたしの一寸階下に下りた間、隣の席の田宮とただ喧嘩をしたにすぎないんですが……？

校長　何でしかし……？

峰　いゝえ、何でといふほどのこともないんで、田宮のもつてるものを野上がみせろといふ、田宮が嫌だといふ。——それがもとでぶつたとか抓つたとか。——結局田宮を泣かしてしまつたので……

校長　で？

峰　それから二人を殘して小言をいひました。——が、いへば、田宮のはうにつみはありません。——ことは野上一人のうへにあります。——田宮をさきに返し、一人にして、それからまた一時間ほどはッきりいつて聽かせました。

校長　……

峰　（いかにもさう感じたやうに）驚きました、しかし。——驚いたよりもあきれました。——それほどいつても、何とさういつても、決して返辭といふものをしません。——口を結んだなり、それこそ、泪一つこぼしません。

校長　……

峰　大てい腹が立ちました。——思はず大きな聲も出しました。——が、それでも默つてゐます。——默つて、ぢッと、しまひには反抗するやうにこつちの顏を睨めつけます。

校長　……

峰　微塵も子供らしいところがありません。——子供らしい可愛げといふものが全くありません。——畢竟は横着。何をしてもいゝ、何をしたつて大丈夫だ。——多寡をさうくゝつてゐるのがありありみえます。——（わざと）どういふ理由か知りませんが？

校長　……

峰　が、あゝいふ子供のゐることは外の子供たちに決していゝ影響を與へません。——何とか、これは……？

校長　いえ、それは。——それはわたしもかねがね心配してゐる。——何とかしたいと思つてゐる……

峰　……

校長　何としても、しかし、うちで我儘一杯にさせて置くもので……

峰　……

校長　いえ、實は。——昨日のことについても。——それについても昨夜、わたしのところへさういつて來た……

峰　何と……？

校長　それが、いゝえ、當人うちへ泣いてかへつたのださうで。——いくらだましてもだまらない、わけを聞いてもいはない。——何かいへばいふほど嵩にかゝつて泣く……

峰　そ、さういふ子供です……

校長　で、まア、いろ〳〵にしてやッと口をあかせると、友だちと喧嘩をして殘された。先方もわるいのに、先生、先方は叱らないで自分ばかり叱つた。先生は自分を憎んでゐる……

峰　憎んではゐません。——憎んではゐませんが……

校長　いゝえ、まア、當人がさういつた。——そのくらゐなことあの子供ならいひ兼ねない……

峰　……

校長　で、さきのいふのに……

峰　一體だれが來たんですか、そんなことをいつて？

校長　母親が自身に出向いて來た……

峰　あの「魚吉」のかみさんがですか？

校長　さうなんだ。――それでこまつた……

峰　……

校長　君は、まア、御存じあるまいが、一本氣の、感情の強い。――一旦かうと自分に思ひ込んだら人のいふことなんぞ耳にもかけない。――さういつた質の……

峰　……

校長　だから、それは違ふ、それはさうぢやアないと此方で理合をいつても、あとでは分る、が、そのときには決して飲込まない。――それにいつもこまる……

峰　……

校長　といつて決してわるい人ぢやアない。――勝氣な、親切な。――そこは江戸ッ子だから……

峰　（遮るやうに）で、さきで、何といふんですか？

校長　いゝえ、それが、當人がいやだといふから氣隨にさせる。――當分氣のすむまでやすませるから。――と、まア、さういふんだが……

峰　（冷かに）そんなことだらうと思ひました。

校長　え？

峰　いゝえ。今日、あの子供、缺席でしたから……

校長　（やゝいひ兼るやうに）で、一つ。――そこで一つお願ひがあるんだが……

峰　何でせうか？

校長　と、さう改まつていはれるとこまるが。――どうだらう、――君、野上のうちのものに逢つてくれまいか？

峰　と、それは？

校長　いゝえ、まア、一寸顏を出してくれまいか？

峰　顏を？

校長　すまないが、君……

峰　と、何ですか？――わたしに野上のところへ詫びに行けと被仰るんですか？（色を作す）

校長　（狼狽てゝ）そ、さうぢやアない。――さういふ意味ぢやアない。――さう取られちやア困る……

峰　でも、あなた……

校長　いゝえ、さうぢやアない、わたしのいふのは。――わたしのいふのは双方に。――双方に、まア、いへば誤解……

峰　誤解？

校長　いえさ、まア、さきにも思ひ違へがあれば此方にも……

峰　此方にはありません。――此方には誤解も思ひ違へもありません。

校長　それは、まア、さういへばさうだが……

峰　ありません。――わたしのはうには決してありません。――そんなことのある筈がありません。

校長　でも、これ、さきにいはせると……

峰　さきはさうでせう。――さきにしたらさうでせう……

校長　だから……

峰　が、そんなことの。――つもつてもみて下さい。――そんな不足がましいことのいつて來られる理由がどこにあります――それからしてさきは間違つてゐます。

校長　間違つてゐる。――それだけに。――さういふ相手だけにわたしは……

峰　……

校長　まア、わたしにすると。――わたしにするとことを大きくしたくないと思ふので……

峰　さういふ必要がありませうか？

校長　そ、さういつたら、峰君、身もふたもない。

峰　なくつていゝと思ひます。――あの子供の、あのおいとゝいふ子供の、あの强情な根性の悪い、可愛げのないところを、この機會に、どこまでもわたしは親たちに知らせてやりたいと思ひます。

校長　しかし、それは。――それをするには場合が悪い。

峰　どうしてゞせう？――この機會といふくらゐです、わたしはさうは思ひません。

校長　でも、君、田宮のおてるといふものが一方にゐては……

峰　ゐてもいゝと思ひます。――田宮といふ子供も、體ばかり大きくつて、だらしの

ない泣蟲の、始末にいけない子供ですけれど、昨日は、あの子供に、何の罪科もありません。

校長　そ、そこだ、君。——野上のはうでは決してさう思はない。——だからいけない……

峰　と、あなたは野上のはうからいつて來たことをそのまゝお取上になるのですか？

校長　いえ、さうぢやない。——さういふと角が立つ……

峰　でも、あなたは、野上のはうのことばかり被仰つて、わたしのはうのことは。——わたしのはうからは何にも聽いて下さらないぢやアありませんか。

校長　……

峰　野上のはうのいふことだけ聞くと、わたしが何か、片手落のことでもしたかのやうにしかとれません。——以ての外です……

校長　が、峰君、——君のやうにさういつても。——すこしは、君、わたしの立場も思つてくれないと……

峰　立場？

校長　いろ〳〵、君、わたしにすると。——いろ〳〵そこにうるさいことがあるんでね……

峰　しかし、それは、——被仰るのは野上に對してだけの立場ぢやアないでせうか？

校長　野上に對してだけの？

峰　さうです。——ほんたうのあなたの立場ぢやアないと思ひます。

校長　それは、君……

峰　ほんたうのあなたの立場となれば、さういふ不足がましいことをいつて來たものに向つて、ことさら、ことの是非をあきらかになさるべきだと思ひます。

校長　……

峰　かういつては失禮ですが、あなたはすべてにあんまり御斟酌をなさりすぎると思ひます。——餘計それでおいとのやうな子供はつけ上ります……

校長　（否定するやうに）しかし、そんなことは……

峰　いゝえ、それはさう被仰れないと思ひます。——はッきりこれだけはいへます……

校長　それはさう理窟をいへば……

峰　理窟ぢやアありません、事實です……

校長　でも、君……

峰　……

校長　（强ひてわらふ）それは、まア、君にしてもいろ〳〵いひたいことはあるだらうが。——まア、そこを。——そこを一つ……

峰　……

校長　どうだらう、君……？

峰　……

校長　不承してもらへまいか、今日のところだけ？

峰　不承して、しかし……？

校長　だから、不承して、わたしの顏を立ててもらへないだらうか？

間。

峰　折角ですが……

峰、急に立上る。——手早く清書の直しかけを風呂敷につゝむ——インクと筆を抽斗に入れる……

校長　峰君……

峰　失禮します。（かまはず机のそばを離れる）

校長　君、峰君……

校長の再びさういつたとき、峰、すでにもう階下へ下りてゐる。

間。

露地の下を研屋とほる。——「はさみ、庖丁、かみそり研ぎ。——はさみ、庖丁、かみそり研ぎ……」とゆつくりした調子に呼んで行く聲……校長、ぼんやり立ちすくむ。——人知れず吐息をつく……

やゝ長き間。

階下から、男と女の、にぎやかに人交つた聲きこえて來る。——間もなく、たか子をさきに、高桑、佐々木、どや〳〵といふ感じにあがつて來る。

たか子　高桑さんと佐々木さんがいらつしやいましたわ……（といひかけて）あら、峰さんは？

（あたりをみまはす）

校長　（不機嫌に）歸つた……

たか子　あら、いつ？

校長　いまだ。

たか子　ちッとも、あら、知りませんでしたわ。——いつ玄關を出て行つたらう？——（高桑に）ねえ、あたしたち氣がつきませんでしたわね……

高　桑（うなづく）えゝ……

たか子　きッとあたしたちが話をしてゐたんで默つて歸つたんですわ。——きッとさうですわ。——ほんとにへんな人……

高　桑　先生、趣意書の下書が出來たんですが……

校　長　あゝ、それは……

高　桑　みていたゞいて、すぐでも今日、印刷屋へまはさうと思ふんですが。——さうしないと間に合ひませんから……

校　長　……

高　桑（佐々木に）君……

佐々木、ふところから原稿用紙二三枚に書いたものを出す。——高桑、うけとつて校長にわたす。

たか子（そばから）まア綺麗！——まるで女の書いたやうな字……

高　桑（如才なく校長に）記念といふ字を入れる說と入れない說と兩方あるんですが、これはしかしどつちが宜しいでせう？

校　長　さア……

高　桑　入れると大寺小學校創立二十年記念祝賀會。——そのはうがはッきりしますが長すぎると思ひます。——たつた二字てたいへんしつッこくなります。

校　長　少しでも、それは、いひ易いはうがいいでせうね。

高　桑（佐々木をふり返つて）そら、君……

校　長　しかし、わたしは、眼鏡を……（扶をさぐる）

たか子　階下ぢやアありません？

校　長　と、思ふが……

たか子　とつて來ませうか？

校　長　しかしこゝにゐたんではどのみち仕方がない。——階下の教場へ行かう……

たか子（高桑と佐々木に）そら御覽なさい。……だから、あたしが、どうせ階下へ來るんだから呼んで來て上げませうつていふのに無理に來るつていふんですもの。

高　桑　だつて大ぜいゐるのに……

たか子　いゝぢやアありませんか、大ぜいゐたつて。——いくらゐたつて、みんな、お針の人たちばかりぢやアありませんか。——（わざと）大丈夫よ、とつて喰べようとは誰もいはないから……

高　桑　いゝえ、それアね、とつて喰べられても構ひませんがね……

たか子　あれだ！

校　長（さうしたとりやりを聞くに堪へないやうに）と、とにかく階下へ行かう……

校長、自分からさきへ立つて階下へ行く。——たか子、高桑、佐々木、そのあとにつゞく。高桑、そッとたか子のうしろからいたづらをしかける……

第二場

大寺學校の住居。——といつても教場の一部につづいた六疊と四疊半ほどの二タ間。——六疊のはうは校長の書齋。（但し、書間は、たか子がそこで四五人の裁縫の弟子たちをとつてゐる）——四疊半のはうには、茶簞笥だの、長火鉢だのが置いてあつて臺所につゞく。——玄關へのかよひ路に狹い廊下がついてゐる。

前の場と同じ日の午後八時すぎ。——たか子、座敷の眞ん中に鏡臺を出して髮を結つてゐる。お久、そばにすわつてそれをみてゐる。——教場のはうに向いた障子に燈火のかげのさしてゐるのが、校長の「夜學」の子供たちを敎へてゐることを語つてゐる。

……細々とさびしい蟲の音。……やゝ長き間。……たか子、髮を結ひをはる。

たか子　あゝ、やつと出來た。——すぐのつもりが……（柱に懸つた時計をみて）あら、八時すぎよ、もう……

お　久　えゝ。

たか子　戯談ぢやアない、一時間の餘もかゝつたわ。

お　久　眞逆……

たか子　いゝえ、かゝつたわよ。——あんたの來たの、まだ、七時だつたもの……

お　久　えゝ、でも……

たか子　あんまり、はじめ、お饒舌したのがいけなかつたんだわ。——あれで手がお留守になつたんだわ。——どう……？（お久にみ

る）

お　久　よく出來ましたわ。

たか子　さうかしら？——自分ぢやア何だか……（はう〳〵體つてみる）

お　久　氣に入りません？

たか子　駄目ね、矢つ張。——時間のかゝるときはかゝるだけのわけが矢つ張あるんだわ。——お饒舌したからばかりぢやアないわ。——こゝんとこ、いろ〳〵じれつたい、くさ〳〵することばかりあるもんだから……

お　久　……

たか子　いゝわ、明日また結ひ直すから……

（が、未練になほ鏡の中をのぞく）

お　久　以前、よく、圓髷に結つてらしたぢやアありませんか？

たか子　よくでもないけど……

お　久　またお結ひになつたら？——よく似合ひますわ。

たか子　ときどきはあたしも結ひたいと思ふけど。——でも、先生が嫌な顏をするから……

お　久　どうしてゞせう？

たか子　どうしてだか……

たか子、油の手をふく——散亂つた鏡臺のまはりを片づける。——ともゝ〳〵お久も手傳ふ。

間。（……蟲の音）

たか子　さ、行かう。——お待ち遠さま……（立つ）

お　久　お師匠さん、このビンは？

たか子　あゝ、それ。——いゝわ、鏡臺ゝなかへ入れといて頂戴……

お　久　ぢやアこゝへ入れときますわ。（抽斗をあけて入れる）

たか子　あんた、お湯の道具は？

お　久　あつちにあります。（寒所のほうへこなし）

たか子　ぢやア、もう、出かけていゝわ——あたし、すぐだから……

お　久　ぢやア、さきへ出て待つてます。

お久、寒所のほうへ出て行く。——たか子、鏡臺をいつも置いてある位置に直したあと、簞笥から羽織を出して着替へる。

たか子　（敎場のほうに向いた障子をあけて）ぢやア、一寸、お湯に行つて來ますから……

それに對して校長かげにて何かいふ。

たか子　（不精無精な感じに）とゞけるだけでいゝんですね、机の上に出來てるだけを……？

たか子机の前により、すでに書き上つた琴の目錄の幾組かを風呂敷に包んで立つ、そのまゝ寒所の方へ出て行く。

やゝ長き間。（……蟲の音）

敎場のほうに「夜學」の子供たち（二三人）のかへつて行く物音きこえる。——しばらくして敎場のほうに向いた障子の燈火のかげ消える。——校長、入つて來る。

間。

校長、机のまへにすわる。——入念に墨をすり出す。——ほまち仕事の、琴の目ろくを書く仕事にとりかゝる。

外の聲　御免……

校　長　はい……

障子あく、——廊下に、光長、立つてゐる。

校　長　お入り……

光　長　へえ……

光長、入つたあとを閉める。——校長、筆をおいてむき直る。

光　長　行つてまゐりました。

校　長　御苦勞でした。——（不安げに）どうでした？

光　長　どうも、いえ、分りにくいところで……（わらふ）

校　長　（けゞんらしく）番地をしかし……？

光　長　その番地を、いえ、さがしますのに大骨を折りました。——實は、わたくし、あちらのほうは始めてゞ。——それには、小梅といふところを、あんな廣いところと思ひませんでしたので……

校　長　わたしもよくは知らないが……

光　長　いつそ土手から入ればよろしかつたのを、正直に水戸さまの裏へまはつたもので、暗さは暗し、搔暮見當がつきません。——やつと、煙草屋をさがして番地を訊くと分らないといひます。——かういふ植木屋はないかといふと、こゝいらは植木屋だらけだから分らない。——さういふ覺束ない返事で……

校　長　……

光　長　仕方なく、今度は、植木屋でさがしました。——同業者をそれからそれたづねま

した。——それでやツと知れましたが、何の、あなた、まるでそれまで見當のちがつたところをあるいてをりましたので……

（わらふ）

校長　で、ゐましたか、峰君は？

光長　をりました。——ちやうどいゝ鹽梅に、いま歸つて來た……といふところで……

校長　といふと？

光長　學校のかへりに、深川の、もとの主人のうちへまはつたとかで……

校長　もとの主人？

光長　辯護士とかいつてをりました。

校長　で、してくれましたか、話？

光長　いたしました。——よくあなたのお心もちを傳へました。

校長　で、何と……？

光長　へえ、峰君よく分つてくれまして……

校長　（ポツとしたやうに）分つてくれた？

光長　へえ、自分もわるかつた。——自分もいひすぎた。——たとへ何であらうと校長にあゝ言葉を返すといふことはなかつた。——君からよく校長にお詫してくれ。——さういつてをりました。

校長　いえ、そんなことは。——もとゝこつちも無理をいつたんだから……

光長　へえ。

校長　で？

光長　しかし。——勿論、いえ、お詫をしてくれといふ位で、そのことについては何とも思つてをりません。——何ともゝう思つてはをりません。——が、先刻その。——先刻學校を出たときはわけもなく料簡がいきり立つてゐた。……と、峰君、笑つてさう申すんで、そのつまりいきり立つたまぐれ、まゝよ、二度ともう學校の閾はまたぐまい。——で、すぐ、深川の、もとの主人のうちに駈けつけて實はこれ〳〵。——氣の早い話、身のふり方をたのみましたのださうで……

校長　……

光長　と、ちやうど、では、事務所に缺員がある。お前ならいゝから入れてやる、明日からやつて來い……

校長　……

光長　と申すのが、いろ〳〵聞きますのに、主人といふ條いくらか緣も引いてをりますんださうで、まへにそこを出ましたのも、申せば、峰君、自分の勝手に、一人で當分勉强したい。——で、こなたの御厄介になりましたやうなわけ。——從つて、歸るにしても、何のいさくさもないわけで……

校長　……

光長　校長の折角さう被仰つて下さるのを。——折角のその御好意を無にいたすやうで何とも相濟まないわけですが。——といつて、その、これを峰君、わたくしに。——それはこまる。——わたくしにそれは取次げない。——固くさう申したのですが……

校長　……

光長　とにかく御覽をねがひます……

光長、峰にことづかつて來た封書をそツと校長のまへに置く。——校長、とり上げる……

光長　辭職といふことは、この場合、何としてもおだやかでない。——世間の思惑もある。——くり返しさう申したんですが、そこは若いだけ、一旦かうと思ひこむと……

校長　……

光長　いづれお目にかゝつてお詫もいたします。……これまでのお禮もいろ〳〵申述べます。——ついしてかうしたことにはなつたものゝ、決してそんなわけではない、いはゞ一身上の、いつまで自分も安閑としてはゐられない。——あと二三年のうちにはどうしても辯護士の試驗をとらなければならない。——さうしなければ鄕里の親に顏むけが出來ない。——それにはちやうどいい機會だから……

校長　……

光長　さういはれますと。——峰君のお父さんとわたくしとは同年で……

校長　……

光長　わたくしにいたすと、しかし、折角おつかひに立つた甲斐のないことになりまして。——何とも。——何とも面目ございません……

間。